

伊藤整の旧蔵書と訂正本をめぐる

飯 島 洋

日本近代文学館の設立に大きくかかわった伊藤整の旧蔵書は、没後数次にわたって同館に寄贈された。『日本文壇史』の執筆などにあたって大量の文献を博搜した伊藤にとって、資料を後代に遺すことの意義は身をもって理解していたと思われる。

旧蔵書の概要をはじめに記しておく。

著者訂正本 80 冊以上 (1971.9 受入)

伊藤整編著訳書 290 約点 (1971.9)

文学全集類約 30 点 (1971.9)

伊藤整著書 (1972.1)

旧蔵書三万点 (1982.3)

生田春月、岩野泡鳴など 700 冊 (1982.7)

雑誌「心の花」「太陽」など (1982.7)

献呈署名本、日露戦争資料、切抜き (1992.9)

ただし、これらの資料は膨大な量に達することもあって、未だ十分に整理されていない。訂正本のみは特別資料に登録されているものの、他の文献は単行本の類が紙台帳に、台帳ごとに著者五十音順で記載されているにとどまる。文学館サイトの蔵書検索によっても、特に伊藤整文庫として情報を抽出することはできない。資料の状況を調査する場合は、台帳に記載された番号により、一

冊ずつ通常の手続きを経て閲覧する必要がある。

また、旧蔵書約3万点のうち、図書は和書洋書併せて三千点余りで、残りは雑誌類とのことであった。雑誌類についてはそのタイトルも含めほとんど不明の状態にある。

というわけで、伊藤整旧蔵書に関する研究は、紙台帳に書かれた書誌情報をデータ化するところから始まる。ただここで、寄贈された旧蔵書＝伊藤整が所持していた文献の全貌、とは断言できないことには留意しておく必要がある。たとえば、台帳には日大での代講や『小説の研究』（第一書房、1936）の代作から、ノーベル文学賞受賞決定後の三島由紀夫を交えた鼎談に至るまで関わりを持ち続けた川端康成の作品は、『伊豆の踊子』一冊しか記載されていない。またその書誌情報も書かれていなかった（これは台帳中、本作と佐藤春夫『病める薔薇』だけの極めて例外的なものである）。また、伊藤に「工大時代英語を教わり、文芸部でもお世話になり（「氾濫」のモデルと私」、「東芝ライフ」90号、1959.6）、さらに「今度書かれる長編小説に、接着剤の研究者を登場させるから、その技術的な知識を講義してくれ」と依頼されて「数時間かかって高分子科学のまとまりのないおしゃべり」（同前）をする（これが『氾濫』に結実する）といった交流があり、のちに『伊藤整』（潮出版社、1980.9）を刊行した奥野健男についても、『二刀流文明論 戦中派の抒情と毒舌』（冬樹社、1964.9）一冊しか記されていない。奥野は『現代作家論』（近代生活社、1956.10）から『太宰治論 増補決定版』（春秋社、1968.11）まで、伊藤死没以前に既に多くの単著を刊行している。

入手しなかったということだけでなく、遺族が所蔵されているか、散逸した

可能性もある。或いは基本的には雑誌類とされる約3万点の資料のなかに存在するのかも知れない。この点は引き続き調査してゆく必要がある。

一方で放送台本という大変興味深い資料も見出せる。『連続放送劇 虹』ラジオ放送台本、『連続放送劇 女性に関する十二章』ラジオ放送台本、『氾濫』テレビドラマ台本が、1971年9月受入分の台帳に確認できる。(なお、テレビドラマ『氾濫』(全17話)は1961年3月1日から6月2日までTBS系列で放映され、主演の真田佐平は映画版の『氾濫』(大映、1959)と同じく佐分利信が演じている。)伊藤整が台本や完成作について何らかの書き込みをしているかにとどまらず、国会図書館の納本制度の対象になっておらず散逸してしまうことも多いこと、さらには多くの場合古いラジオ・テレビ番組はアーカイブされずに完成作が保存されていないことから、そもそも台本自体に資料としての価値がある。

さて、上述したように本研究は旧蔵書のデータベース整備をまずは進める必要があるため、その内容に踏み込んだ分析はそののちの作業とならざるをえない。

しかしながら、筆者はデータ入力を進めると同時に著者訂正本の存在に深い関心を抱いた。訂正本は特別資料として別個に配架されているため、まとまった調査を行うことができる。伊藤整が文章の彫琢に非常にこだわったことは、出版社に提出する段階の原稿にも内容にかかわるものから微細な表現に至るまで大量の書き入れをおこなっていることからうかがえる。ではその入念な作業を経て無事に著書が出版されたあと、作家は作品にどう向き合うのか。拙稿では、伊藤が詩人としての出発点に立つまでの自身を描いた自伝的小説『若い詩人の肖像』(新潮社、1956.8)を取り上げ、いわば「ポストテキスト」ともいべき問題の一端について報告したい。

*

『若い詩人の肖像』について、筆者は雑誌連載時の原稿（こちらにも日本近代文学館に収蔵されている）を調査し、分析をおこなったことがある（「伊藤整『若い詩人の肖像』の生成 自己虚構という批評」、「国語と国文学」96 卷 9 号、2019.9）。拙稿では『肖像』において、伊藤が単に詩人になろうとしていた頃の自己を回想して叙述したり、小説的虚構を交えたりしているにとどまらず、詩人になろうとする人間「私」を、彼に対して批評的な距離をとりつつ描こうとしており、それが虚構という方法の基盤となっていることを論じた。

自己像を徹底的に突き詰めて「創造」してゆく姿勢が初出原稿から浮かび上がったが、その姿勢はやはり、単行本が刊行された後も継続している。言及する部分の確定が入稿直前にずれこんだため、本稿では初刊本を訂正本の書入れが反映された改訂版の本文と比較するという形で、訂正本の果たした役割を紹介する。

「一 海に見える街」で、「私」は浅田絶子という少女に惹かれながらも、「女学生」の一人である重田根見子と知り合い、手紙を交わすようになった。「私」は重田の手紙の表現を月並みだと思うが、自身にとっては「表現のみが真実」とはいえ、「詩や小説ではない」愛の手紙において、巧拙と「価値とは無関係」と気づく。そして知人の一人と舟に乗り、「船の揺れるリズムの快さ」から逆説的に「生の不安」を想起する。この場面の段は、『若い詩人の肖像』新潮社版初刊（以下『肖像』）は次のように始まっている。

七月の末に近い頃私は塩谷村の自家に落ちつき、やつと年齢にふさはしい海水浴や魚釣りを村の友人たちとたのしみはじめた。ある日私は (p54)

これは訂正本への書入れを経て、『伊藤整作品集第九巻』（光文社、1958. 1、以下『作品集』、新仮名遣いに変更されているが促音は「つ」となっている）では次のように改訂された。

重田根見子と手紙のやりとりをするようになってから後のある日、私は (p45)

村の若者たちと同じように、「年齢にふさはしい」遊びを楽しめるようになることは、詩を書く人間としての葛藤とは相いれないという判断があったのであろうか。

次は、「七 詩人たちとの出会い」における、梶井基次郎と出会い、語らう場面。同人雑誌「青空」に載った三好達治の「太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪は降り積む。」を梶井が評価したのに対して、「私」は内心では詩句のもつ「ノスタルジアの力を羨ましく」思いつつ「三好君の傑作ですね」と応じる。その詩句に対する形容が、訂正本を通して変容する。

『肖像』では「その単純な詩句」(p349)となっていて、確かに外形的には三好の「雪」は「単純」ともいえようが、この表現はやはり羨望の念を抱いていることとそぐわない。『作品集』では「その韻律的な詩句」と改められた。「雪」

のもつ魅力を喚起する語としては、こちらの方が遥かに適切と思われる。

訂正は『肖像』初版刊行の翌月9月に早くも増刷された2刷でも継続される。

「二 雪の来るとき」では、「私」は根見子との関係を深め、「感覚し、触れ合い、求め合う命の喜び」を感受するようになる。

「この町」の「最高学府」である、「自由主義的」な方針の高等商業学校の学生は、個人の行動を咎められてはほとんどなかった。学校を休んで根見子と町を歩いても、「町の人が目をそばだてること」もなかった。「口のうるさい」汽車通学生はどうか。この点について、微細な修正が施されている。「その時刻には」彼らは学校にいる。だから「安全であつた」(p77)と『肖像』では断言される。心配ないことは客観的な事実とされている。ところが2刷訂正本での手入りを反映した『作品集』では「安全だと思つていた」となり、自分たちの主観的判断であるという留保が加えられた。恋に夢中になっている若者を、距離を置いてみつめる語り手の姿が浮かび上がる。

*

これまで内容を確認した訂正本には、出版社の校正が初刊段階で見落としのような微細な文言の問題に至るまで、伊藤がかなり徹底的なチェックをおこなっている様子がみえてくる。伊藤らしい、様々な事情を勘案したらしいかなり慎重な判断によると思われる修正も散見される。現段階は全体像を示すことは出来ないが、単行本を出したあとの本文との向き合い方の典型の一つを、伊藤整の訂正本は示しているといえる。